

ダンゴムシ知っていますか？

ダンゴムシは、子ども達の大好きな動物の一つです。外遊びをしていると、「ダンゴムシ見つけた！」「どこで見つけたの？」「いいな！」とか、「先生、ダンゴムシ飼いたい！」「ダンゴムシ迷路作りたい！」など、様々な声が子ども達から聞かれると思います。ところで、先生方はダンゴムシについて、どの程度知っていますか。「手で触ると丸くなる。落ち葉を食べている。日陰にいる。…」とても身近な動物ですが、知っていることは結構少ないのではないのでしょうか。そこで今回は、ダンゴムシについてまとめてみました。

(1) ダンゴムシの特徴を知ろう

①ダンゴムシのからだについて

触覚

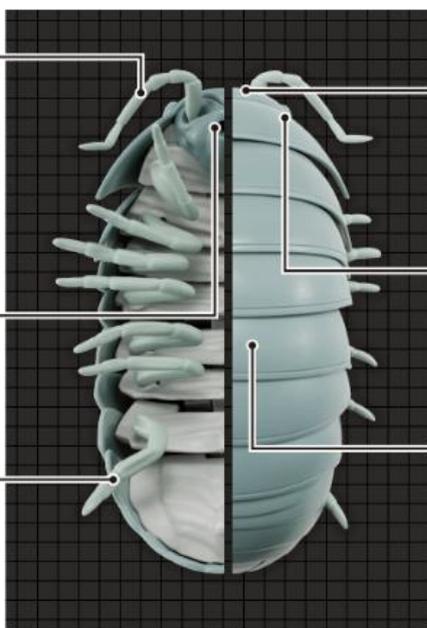
びよこびよこ動く触角は第二触覚といい、障害物の有無など歩くときに必要な情報を得るのに役立っています。匂いを感じる第一触覚は退化して殆ど見る事ができません。

口

硬い顎はペンチのように発達しており、硬い餌をかじることができます。

足

生まれたばかりの時は足は12本しかありません。脱皮を終えると成体と同じ14本になります。



頭部

目についてる体節が頭でヘッドシールドともいいます。

目

個眼の数は50個程で、目が悪いと考えられています。

背中

オスは模様がないことが多いのに対し、メスは黄色の模様があります

☞ダンゴムシの顔は、体の一番前の節にあります。顔は楕円形をしていて、サイズこそあまり大きくありませんが、目や触角、口など生きていく上で必要な器官がそろっています。特に出っ張ったりしていないので虫メガネがないと観察しにくいのですが、顔の両端には小さな目がちゃんとついています。この目は他の昆虫と同じように、小さな目がいくつも集まって一つの目になっている「複眼」と呼ばれる構造のものです。しかし、視力はあまり良くないようで、明るいか暗いかがわかる程度とされています。

②ダンゴムシのすみか食べ物について

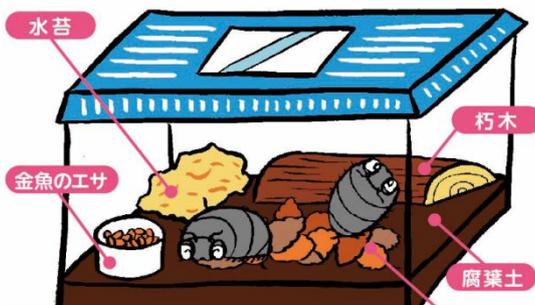
☞ダンゴムシは湿気を好むので、暗くジメジメした場所にいます。落ち葉の下や石の裏、植木鉢の下など、ほかの生き物がなかなか住めないような狭い場所でも良く見かけます。ダンゴムシは雑食です。落ち葉や草の根のほか、昆虫の死骸、段ボールや新聞紙などの紙、はてはカルシウム摂取のためコンクリートまで食べてしまうほど、いろいろなものを食べて暮らしています。

③ダンゴムシの寿命について

☞ダンゴムシの寿命は2～4年ほどで、思ったよりも長いです。寒い季節は、石の裏や倒れた木や落ち葉の下などでじっとして（冬眠して）冬を越し、春になると活動を始めます。

（2）よくある質問

①ダンゴムシってどうやって飼うの？



☞昆虫ケースに、腐葉土を3センチほど敷いて、餌となる枯葉、隠れ家となる朽木や木の皮、保湿のための水ゴケを入れれば完成です。飼育のポイントは、

*腐葉土は昆虫用のものを使います。（ガーデニング用は農薬が入っている場合もあるので注意する）

*エサは、野菜くずなどを与えます。金魚の餌を使うのが簡単です

*霧吹きで適度な湿り気を与えます（乾燥させない。また、与えすぎに注意すること）

*ダニやカビの発生を防ぐために、腐葉土を一度冷凍する。餌を腐葉土につけないこと

*水やりをするときには、ダンゴムシに水をかけないようにします

*飼育ケースを空き箱で代用する場合は、空気穴をあけてください

②ダンゴムシはどうして丸くなるの？

☞ダンゴムシを刺激すると体を丸めて、まさに「団子」のように丸くなります。これは天敵に狙われた時の防御の姿勢で、硬い背中側の殻を盾にして柔らかい腹側をしっかりガードしているのです。ダンゴムシによく似た動物にワラジムシがいます。こちらは丸くなることはできません。天敵に襲われえた時は、カメムシのように体からにおいのある物質を出して、身を守ります。

③ダンゴムシの迷路ってどうつくるの？

☞ダンゴムシには、交替性転向反応という習性があります。これは「右に曲がった後、次の曲がり角では左に。逆に左に曲がった後、次の曲がり角では右に曲がる」というように、方向を左右交互に変えながらジグザグに進む習性のことです。ダンゴムシのほかにはアリやハサミムシ、ゴキブリの仲間で見ることができる反応です。この反応は敵から身を守るためのものと言われていています。この反応を理解していれば、空き箱や段ボールなどを使って迷路を作り、無事ゴールできるダンゴムシ迷路を作ることができます。ちなみにセリアなどには、「ダンゴムシ迷路キット」が売られています。

（ただし、全てのダンゴムシが、交替性転向反応を示すとは限りません）

外遊びの際、子ども達から様々な質問をされた経験はありませんか？実はそのような子どもからの投げかけは、とても大切なチャンスなのです。子どもの遊びの世界を広げてあげられるまさに好機です。しかし、それを生かすためには保育者として子どもが興味・関心を持ったことに対して、ある程度の知識を蓄えておくことが必要になります。その知識は保育者にとっての「保育の引き出し」の一つです。保育の引き出しを増やす方法には、他の先生方の保育の仕方を真似ることや研修会で学ぶことがあるでしょう。しかし最も大切な引き出しづくりは、保育者自身が子ども達と同じように、興味・関心を持ってやってみる、調べてみるることなのです。ぜひ子ども目線に立って、自然に目を向けてみてください。

話は変わりますが、皆さんに考えて欲しい事を書きます。みんなに触られて弱気味のトカゲ、「トカゲさん元気がないようだけど、逃がしてあげる？それとももう少し遊ぶ？」と聞いたところ、「もう少し遊ぶ！」との返答。さて保育者としてあなたならどうその子に対応しますか。これは自然保育での「命を教える」大切な場面です。ぜひ考えてみてください。

（専門員）